

日本に通じる点も多いイスラーム社会。 それを理解することは、 未来につながる扉ともなる。

「イスラーム圏」と聞いて、あなたはどんなイメージを抱くだろうか？ 宗教に縛られた堅苦しい社会。異なる意見を受け入れない非寛容な社会……。総原油輸入量のうち85%の輸入元となっているなど、日本にとってイスラーム圏は重要な地域である。にもかかわらず、私たち日本人の中で、その地域への理解は驚くほど進んでいない。「イスラーム圏は、難しいところでも怖いところでもない」と断言する櫻井先生をナビゲーターに、その地域をのぞいてみよう。

「遅れている」のではない。 自ら「近代化を選ばなかった」 イスラーム社会

「日本人にとってイスラーム圏は、これまでは『わからない地域です』と言っているわけが、近ごろでは『怖いところですね』を合言葉に了解する世界。それ以上は何の進展もない。果たしてこれでよいのでしょうか？」と櫻井先生は問いかける。「イスラーム圏」とは、イスラームの教えを基盤として社会が成り立っている地域のことである。その範囲は中東・北アフリカから中央ア

ジア、南アジア、東南アジアにまで広がり、そこでは世界人口の5分の1に相当する人々が生活している。櫻井先生は、「イスラームの社会システムの解明」を主要な研究テーマの一つとして設定し、30年以上イスラーム圏と向き合ってきた。「イスラーム社会のユニークなところは『シャリーア（法）』があることです。」

シャリーアは一般に「イスラーム法」と訳される。この言葉を耳にしたことがある人もいるだろう。しかし、注意しなければならないのは、「法」という言葉がつくからといって、イスラーム法を私たちが日頃親しんでいる「法律」と同様のものだと考えると、正しい理解ができなくなるという点だ。イスラーム法は生活全般に関わっているという。「イスラーム法は、刑法・民法・商法といったいわゆる法律的な面はもちろん、衣食や道徳的な領域までカバーする生活マニュアルのような側面も持っています。つまり、『行動規則』ととらえた方が実像に近いかもしれません。」

イスラーム法は決して、よく言われるような、ムスリム（イスラーム教徒）を厳しく縛る戒律でも、古め

かしい決まりでもない。7世紀に預言者ムハンマドを通じて啓示が下されて以来、イスラーム法は核となる不変の部分と、時代に即してきめ細かく解釈が施される部分から成っている、と櫻井先生は言う。「ただ古からの戒律を守るだけの宗教だったら、14世紀にもわたってイスラーム圏がこれほどまでの広がりを持つことはなかったのではないのでしょうか。イスラーム法は、アッラーが命じる『公正な社会』を実現するための指針です。読み解いていくと、とても合理的で先進的だということがわかります。」

かしい決まりでもない。7世紀に預言者ムハンマドを通じて啓示が下されて以来、イスラーム法は核となる不変の部分と、時代に即してきめ細かく解釈が施される部分から成っている、と櫻井先生は言う。「ただ古からの戒律を守るだけの宗教だったら、14世紀にもわたってイスラーム圏がこれほどまでの広がりを持つことはなかったのではないのでしょうか。イスラーム法は、アッラーが命じる『公正な社会』を実現するための指針です。読み解いていくと、とても合理的で先進的だということがわかります。」



櫻井 秀子 (さくらい ひでこ)

神戸大学経営学部（マーケティング論専攻）卒業。国際大学大学院国際関係学研究所（中東地域研究専攻）修士課程修了。博士（経営学）（明治大学）。イラン高等教育省人文科学研究所客員研究員、国際大学中東研究所研究員、作新学院大学総合政策学部教授を経て2009年中央大学総合政策学部教授。専門は中東地域研究、イスラーム社会思想、異文化経営。

イスラーム社会が遅れている、古いと見るのは近代至上主義の視点だと櫻井先生は語る。「欧米こそが先進的ではないお手本」とする近代至上主義の考え方に、私たち日本人も生まれた時からどっぷり浸かっており、欧米を絶対視する傾向がある。しかし、近代の社会システムの文化

的土壌とイスラームのそれは異なる、と櫻井先生は指摘する。「むしろ、独自の合理的なシステムを持つイスラーム社会は、自ら『近代化を選ばなかった』と言うこともできるので。」
経済格差の拡大や環境問題の深刻化、金融危機、原子力エネルギーがはらむ問題点等、近代文明のもとで

発展を追求してきた世界は、現在多くの壁に直面している。しかしここで、イスラームが近代的発展をええて選択しなかった理由を探ってみれば、難局打開の手がかりがみつかるかもしれない、と櫻井先生は話す。

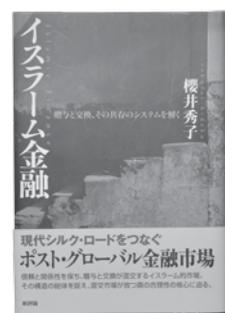
「贈与と交換の共存」という 独自システムで成り立つ イスラーム金融

イスラーム社会が育んだ社会システムの中で、今、特に脚光を浴びているのが「イスラーム金融」だろう。2002年以降の原油価格の高騰にともない、世界の主要な産油国が点在するイスラーム圏に莫大な資金が流入したことから、独自に発展してきたイスラーム金融が世界経済の中で頭角をあらわしつつある、と櫻井先生は語る。「イスラーム金融は、世界経済の中核であるグローバル金融にはない特徴的なシステムを有しています。まずそれは利子のない金融です。なぜならば、先に述べたイス

ラーム法が不労所得である利子を禁じているからです。日本でもこのようなイスラーム金融への関心が高まっており、経済や金融の専門家が積極的に研究を進めています。その多くは、無利子金融の技術論にとどまっている印象があります。イスラーム金融の基盤にある経済システムの独自性についての理解ははまだ



イスラーム社会学者A. シャリーアティーの『イスラーム学』をペルシャ語から翻訳。この本はイラン革命の中心思想の一つとなった。



櫻井先生の著書。「イスラーム金融」の本質が良くわかって、高い評価が寄せられている。



櫻井ゼミでは、活発なディスカッションが行われます。

深められていないことを、イスラーム研究者として感じています。」

櫻井先生によると、イスラーム経済の独自性は、無利子だけではないという。イスラームでは、イスラーム法に定められた正しい方法で稼いで、さらにそれを正しく使わなければならぬそうだ。ギャンブルが禁

じられているのはもちろんだが、ただひたすら貯め込むのもご法度だ。有効に投資したり、貧しい人に喜捨を施したりして、社会にお金が還流するようにしなければならないのだ。このようにイスラームでは、生産や売買から得た利益（＝交換による利益）の一部が、喜捨（＝贈与）されるといった循環ができています。そしてこのような贈与と交換の共存があつてはじめて、イスラーム経済が成立していると言える。

ここから垣間見えるイスラーム経済の基本は、堅実な労働にもとづいて利益を得ることと、極端な所得格差をなくすことで、特にむずかしいわけではない。そしてこれはバブル経済に沸く以前の日本の状況にも似ていなくもない。それは、皆が堅実に働き、総中流社会を自負していた社会だ。1980年代前半にイスラーム圏から日本を訪れた櫻井先生の友人も異口同音に、『日本にはムスリムがいないのに、イスラームの教えが実現されている』と言っていたそうだ。

イスラームといえばエキセントリックな感じがするし、無利子なんて変な経済と思つたけれど、よくよく考えると、利子が雪だるま式に増えていくグローバル経済のマナー・ゲームの方が、よほどおかしいという気がしてきた。櫻井先生は「それが大事なんです」と言う。異文化を知るということは、とりもなおさず、自分が当然と思つていたことを別の角度からとらえなおすことでもあり、その新たな視点が次のステップへとつながるのだ。

それにしても、日本でのイスラーム理解は進んでいない。櫻井先生は、その要因の一つとして「メディアのバイアス」をあげる。それはイスラームをネガティブなイメージに固定する欧米メディアのバイアスをそのまま受け継ぐものだ。「これは逆に、イスラームに欧米を頂点とする近代文明を覆す可能性があると思われているからかもしれません。私は1983年にはじめてイランに行き、その後留学しましたが、日本でイラン革命報道を見て抱いたイランのイメー

ジと、私が経験した現実のイランは、まったくかけ離れたものでした。メディアによるネガティブなイメージの増幅は、インターネットが普及した近年、ますます顕著になっていると感じています。」

西アジアを通じて、近代社会の問題点を見つめ 新たな視点を獲得

櫻井先生のゼミでは、イスラーム圏の中でも特に「西アジア」を中心に演習を行っている。指導の中で櫻井先生が心がけているのが、「西アジアについてはもちろん、西アジアを学ぶことを通じて、近代社会や先進諸国の問題点を学生に深く理解させる」ことだという。

ゼミ生が行う研究の基礎は文献を読むこと。イスラームの社会システムについて解説する基本的な文献を読み、西アジア研究の基盤となる知識や視点を養う。次にイスラームや西アジアから少し離れ、新自由主義



毎年1月、卒業生もかけつけて4年生の卒論報告会を開催しています。

や紛争、貧困などをテーマとした文献を通読することにより社会科学面での知識を養っていく。そして学生それぞれが関心を抱いたテーマを選び、本格的な研究に入る。

その際、櫻井先生は個々のテーマについて文献を示してくれる。もちろん、それしか読んではいけないうことではないが、と櫻井先生はコメントする。「今は情報が多い分、

それぞれの質も玉石混交。まず基本的に読むべき文献を私が示し、それを通じて、学生に情報を自分で取捨選択できる力を身に付けてもらいたいと考えています。」

「西アジアを理解すると欧米がわかる」と櫻井先生は語る。「米国やヨーロッパの政策がつかめるのです。これは、欧米が日本に向けている表情だけを見ているはわからないのです。」

西アジアというプリズムを通すと先進諸国の矛盾や問題点、そして現在も冷戦下の日米関係を引きずる日本の課題も見えてくる。

「西アジアに対する政策も、日本は米国に追随しています。しかし、米国の西アジア政策はあくまで米国のためにつくられたもの。今後は日本独自の政策をつくっていかねければなりません。また、新しい日米関係を構築するためにも、日本は西アジアを含め他の国とも新たな関係を築かなければならないのです。」

西アジアを見つめることで、自らの思い込みに気づき新たな視界が開けてくる、と櫻井先生は言う。「とて

も新鮮な体験です。それを味わえることが、この研究の醍醐味の一つだと思います。」

高校生の皆さんへ

近代文明は、情報技術や生命科学といったさまざまな分野で頂点をきわめています。そろそろ転換期を迎えようとしています。ですからこれから大学に進み、社会人になっていく皆さんは、今後の日本、そして世界を牽引する新たな文明モデルを構築する使命を負うこととなります。

しかし近代文明の諸問題が顕在化する中、これまでの成功体験を踏襲するだけでは、新たな道が開けないのは明らかです。そこで観点を変えるためには、既存の概念を打ち破るような覇気をもって、異なる文化・文明に直接アプローチすることが必要です。

もしイスラームに興味があるならば、「難しそう」「怖そう」といった先入観はいったん横においてアプローチを始めましょう。そして何か



イランの雑誌『書籍の世界』に、櫻井先生の研究に関するインタビューが中央大学の紹介とともに掲載されている。

違和感や疑問を持った時は、「なぜなんだろう」と問い続け、答を探してください。そこでは安易な答に満足しないことが重要です。

イスラーム文明についての理解を深めることで、近代社会システムにはない合理的な観点や制度を発見し、新たな文明モデルの創造につなげ、未来の扉を開いてほしいと願っています。